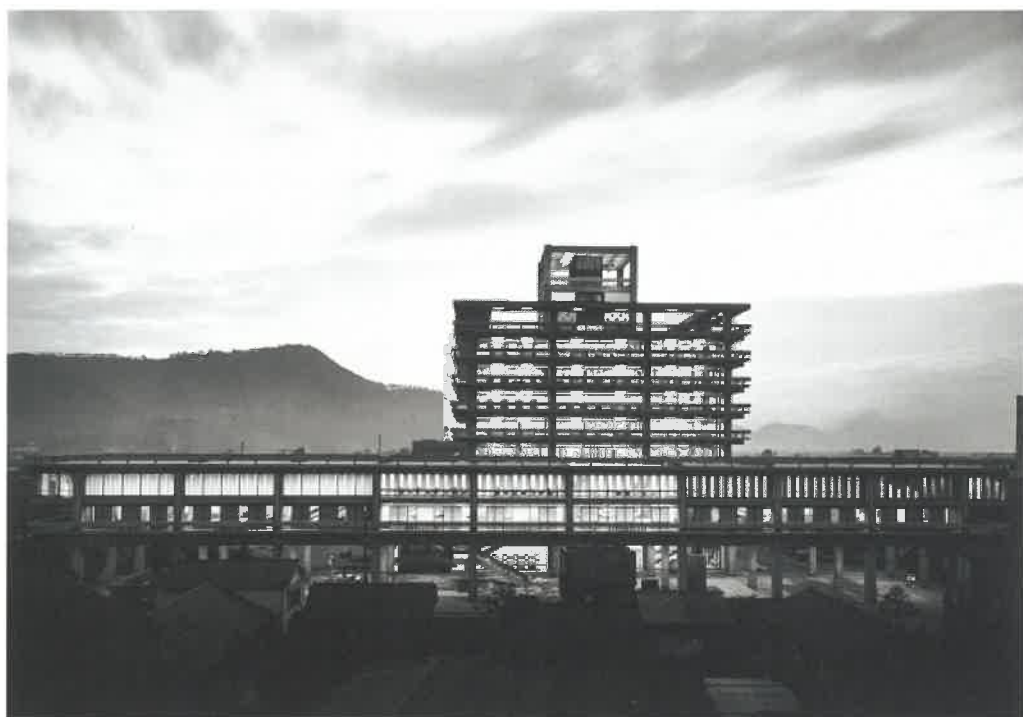


NEWS

The Kagawa Museum

vol. **56**
香川県立ミュージアム
ニュース
2022 春号



©Kochi Prefecture, Ishimoto Yasuhiro Photo Center

Contents

特集

特別展

「戦後デザイン運動の原点 — デザインコミッティーの人々とその軌跡」

ここにも注目!

特別展関連企画

展示室だより

20 世紀の美術 II 一版画の世界

トピック

香川県庁舎 重要文化財に

調査研究ノート vol.43

江戸時代の旅日記

れきみんだより

昭和南海地震体験談

石元泰博《香川県庁舎》

1958 年頃 ゼラチン・シルバー・プリント 高知県立美術館蔵

デザインコミッティーのメンバー^{たんげけんぞう}丹下健三が設計した「香川県庁舎」(1958年^{しゅんこう}竣工)を、同じくメンバーの石元泰博^{いしもとやすひろ}が撮影した夕景の写真です。コミッティーのメンバー同士の交流から建築家と写真家のコラボレーションが生まれました。

この春、戦後デザイン運動の先駆けとなったデザインコミッティー[※]の活動に焦点を当てる特別展を開催します。この特別展は、川崎市岡本太郎美術館と当館が共同で企画したもので、日本デザインコミッティーをはじめ、松屋、国立近現代建築資料館など関係機関からも当時の貴重な資料をご出品いただき、約300点を一堂に展示します。

戦後日本を代表するデザインのほか、建築、写真、絵画まで、多彩な作品が集まる特別展の見どころをご紹介します。

デザインコミッティーの活動の軌跡

1953(昭和28)年、日本に届いた、イタリアの国際的なデザイン展「第10回ミラノ・トリエンナーレ」(1954年)への参加要請に応えるべく、建築家(丹下健三、よしざかたかまさ、せいけいよし、吉阪隆正、清家清)、デザイナー(剣持勇、柳宗理、渡辺力、亀倉雄策)、評論家(勝見勝、浜口隆一、瀧口修造)、写真家(石元泰博)、画家(岡本太郎)らが集いました。「第10回ミラノ・トリエンナーレ」への参加は見送られましたが、デザインを通じた国際交流とデザイン普及を目指し、デザインコミッティーは活動を始めます。

「第11回ミラノ・トリエンナーレ」(1957年)で日本は初参加を果たし、実行委員会に名を連ねたコミッティーのメンバーは、その中心的な役割を担いました。



「第11回ミラノ・トリエンナーレ 日本室 会場風景」1957年
写真提供：国立近現代建築資料館



松屋「グッドデザインコーナー」
1950年代後半
写真提供：日本デザインコミッティー



「グッドデザインコーナー」のための選定会風景 1955年頃
写真提供：日本デザインコミッティー

一方、コミッティーは松屋銀座に1955年設置された「グッドデザインセクション」の運営を同年に引き継ぎます。そして、「グッドデザインコーナー」と改称されたこの売り場に置く商品の選定、併設する「デザインギャラリー」の運営を通して、優れたデザインを普及する活動を展開していきます。

柳のカトラリーや森正洋《G型しょうゆさし》など、現在も多くの人に親しまれているデザインが、「グッドデザインコーナー」選定作品として見出され、紹介されました。

当時の写真からは選定会やグッドデザインコーナーの雰囲気的一端が感じられます。

森正洋《G型しょうゆさし》1958年
デザインモリコネクション有限公司蔵
コミッティーメンバーの指摘を受け、何度も改良を重ねて完成した。



柳宗理《バタフライツール》
(初期型)1956年
柳工業デザイン研究会蔵

デザインギャラリーの展示を再現

現在まで続く「デザインギャラリー」での企画展の記念すべき第1回展(1964年5月)は、メンバーが自分の好きなデザインを選んだ「私の好きなデザイン」展でした。石元は「ライカのカメラ」、柳は「コーヒー沸し」など、それぞれのデザインについての考えをうかがい知ることができます。岡本は自身の作品である《坐ることを拒否する椅子》を出品しました。

第4回展(1964年8月)は、亀倉が企画した「あかり」展でした。イサム・ノグチの《あかり》は岐阜提灯をもとにした作品です。ノグチは牟礼町(現高松市牟礼町)にアトリエを置いた、香川ともゆかりのある作家です。特別展では部分的に第4回展の様子を再現しています。



丹下健三計画研究室《陶製椅子》(香川県庁舎1階ロビー)
1958年頃 香川県蔵



剣持勇《香川県庁舎旧本館知事室机》
1958年 当館蔵



岡本太郎《坐ることを拒否する椅子》1963年
川崎市岡本太郎美術館蔵



イサム・ノグチ《あかり》当館蔵 (川崎会場展示風景)
撮影：佐藤克秋 写真提供：川崎市岡本太郎美術館

メンバーのコラボレーションにも注目!

特別展では、コミッティーのメンバー同士の交流から生まれたプロジェクトも紹介します。たとえば、丹下設計の「旧東京都庁舎」(1957年竣工)では、岡本が壁画を制作しています。また、東京オリンピック(1964年)では、丹下が手掛けた「国立屋内総合競技場(国立代々木競技場)」(1964年竣工)の壁画を岡本が、オリンピックポスターを亀倉が担当しています。特に注目していただきたいのは、「香川県庁舎」(1958年竣工)です。

丹下の設計による「香川県庁舎」は、戦後の庁舎建築として初めて国の重要文化財に指定され、建造物だけでなく、内部空間を構成する猪熊の壁画や剣持の家具類も評価されました(5頁参照)。会場では模型や竣工当時の写真のほか、指定の対象に含まれる剣持のデザイン家具も展示します。

特別展では「1 デザインコミッティー創立」「2 国際交流とデザインの普及」「3 サロンとしてのコミッティー」「4 デザインギャラリーの展開」の4章構成で、デザインコミッティーの活動や、デザインの普及に果たした役割についてご紹介します。また、関連企画の所蔵品展も同時開催します(4頁参照)。

当館で初めてとなる、デザインを本格的に取り上げる特別展をお見逃しなく!

(学芸員 日置 瑠子)

(※)国際デザインコミッティー。現在は日本デザインコミッティーと改称。

特別展 「戦後デザイン運動の原点 — デザインコミッティーの人々とその軌跡」

会期 4月9日(土)～5月29日(日)
休館日 月曜日(5月2日は開館)
開館時間 9:00～17:00(入館は閉館の30分前まで)
夜間開館 4月16・23・30日、5月7・14・21・28日の
各土曜日は～20:00(入館は閉館の30分前まで)
会場 特別展示室
観覧料 1,200円、団体(20名以上)・前売1,000円
瀬戸内国際芸術祭パスポート提示で団体料金

※高校生以下、65歳以上、障害者手帳をお持ちの方は無料
※国際博物館の日(5月18日)はどなたさまも無料
※関連イベントの詳細は8頁インフォメーションへ

in 香川県立ミュージアム 常設展示室4・5

戦後香川とデザインコミッティーをめぐる人々
4月9日(土)~5月29日(日)

デザインコミッティーの創立メンバーで建築家の丹下健三が残した「香川県庁舎」(1958年竣工)、「香川県立体育館」(1964年竣工)の家具は、同じくメンバーのデザイナー剣持勇が手掛けています。また、デザインコミッティーにより、高松市出身の作家が紹介されています。青峰重倫の作品は「グッドデザイン」に選ばれ、秋山泰計の作品はデザインギャラリー第191回展(1976年)で展示されました。本展では収蔵品と関連資料を通して、デザインコミッ



デザインコミッティーをめぐる人々を紹介し
ます。
(学芸員 日置 瑤子)

青峰重倫
《ゼブラウッド深鉢》
1965年 当館蔵

関連イベント

ナイトトーク

4月16日~5月28日の毎週土曜日 各18:30~(約30分)
集合場所:2階 西ロビー 特別展とともに本展の内容についてもお話します。

展示室だより 常設展示室2

アート・コレクション

20世紀の美術Ⅱ — 版画の世界
3月23日(水)~5月8日(日)

当館所蔵の西洋美術コレクションから、今回は版画の装丁に注目してご紹介します。

版画はもともと印刷物として画像を複製するために発明された技法で、新聞や書籍に多く使われてきました。ワシリー・カンディンスキー《響き》やマルセル・デュシャン《大ガラスと関連作品》は豪華本として出版された書籍ですが、読書をするための本とは違い、挿絵の一つ一つが鑑賞に堪える版画作品として刷り上げられ、装丁は大変凝ったつくりです。

一方、一枚の絵として観賞するための繊細な版画作品も生まれ、その額装にはしばしば工夫が見られます。パブロ・ピカソ《ギターを持つ男》は画面サイズが小さいため、額装に余白を大きくとり、作品の存在感を際立たせています。ベン・シャーン《詩人》で目を引く木の素材感を生かした独特な額装は、家具デザイナーのジョージ・ナカシマが親友だったシャーンのために作った特別な額です。ナカシマ《コノイドチェア》と共にご覧ください。

(専門学芸員 一柳 友子)

in 瀬戸内海歴史民俗資料館
瀬戸内ギャラリー 第5回企画展

戦後香川の“新たな産業工芸”創出
— ジェトロ収集海外優秀商品と古民芸に学ぶ —

4月1日(金)~6月26日(日)

※休館日などの詳細は8頁インフォメーションへ

昭和40年代に設置された栗林公園市民芸館や香川県技術開発センターデザイン研究所(当時)などの活動から、デザインで生活を豊かにしようとした戦後香川の新たな産業工芸創出に向けた試みについて紹介します。

(瀬戸内海歴史民俗資料館長 田井 静明)



JETRO 収集海外優秀商品



《詩人》(右)と《コノイドチェア》(左) ※展示イメージ

関連イベント

ミュージアムトーク 3月27日(日) 13:30~

香川県庁舎 重要文化財に

2022(令和4)年2月9日、「香川県庁舎 旧本館及び東館(以下 香川県庁舎)」が国の重要文化財に指定されました。

当館でも「丹下健三 伝統と創造」(2013年)、「日本建築の自画像」(2019年)、「空間に生きる画家 猪熊弦一郎」(2021年)などの展覧会を通して、様々な角度から取り上げてきた香川県庁舎。この度「建築家丹下健三による戦後庁舎建築の最高傑作」と評価されたその内容についてご紹介します。

戦後の庁舎建築

香川県庁舎は1955(昭和30)年に設計され、1958年に竣工しました。設計担当は東京大学の丹下健三計画研究室です。当時の県知事・金子正則は「注文者である私どもは民主主義とは何ぞや、民主政治は如何にあるべきやと建築を通じ色々丹下研究室から教えられた」^{※1}と述べており、庁舎設計に際して戦後の社会の在り方が強く意識されていたことが窺えます。

そして生まれたのは、新しい民主主義時代にふさわしい、県民に開かれた庁舎建築でした。低層棟では歩道に面した1階のピロティが屋内外を開放的につなぎ、県民は壁画のあるロビーや南庭に迎えられて庁舎へ自由に入出りできます。また、2階では県民が集うホールと県民の代表が集う議会議場(当時)が向かい合っています。低層棟の隣にずっと立ち上がる高層棟では、エレベーターや水回りを中央部分にまとめたセンターコアが太い幹のように建築を支えているため、執務室は自由に間仕切り可能になりました。外観は鉄筋コンクリート造ながら、重厚感を抑えた梁や柱が日本の伝統建築を連想させます。

香川県庁舎の空間とデザインは戦後の庁舎建築の模範となり、昭和30~40年代には全国へと広まりました。

芸術家との協働

1階ロビーの陶板壁画《和敬清寂》について作者の猪熊弦一郎は、金子宛の書簡の中で「私の今度の作意は茶道の精神、和敬清寂を四面に題しました、これこそ日本古来のデモクラシーの本体ですから」^{※2}と綴っています。また、県庁ホールの椅子や知事執務机(当館蔵、3頁参照)などのインテリアデザインを手掛けた剣持勇は、1953年頃から近代日本調(ジャパニーズ・モダン)デザインの試作と発表を重ね、日本の伝統美をふまえた近代的なデザインを提唱、牽引していました。

新しい時代を見据えた芸術家たちの協働によって、香川県庁舎の空間に、人々が集うにふさわしい生気と豊かさが加わりました。



南庭から香川県庁舎東館を眺める。右の低層棟1階にはピロティが、正面の高層棟1階にはガラス張りのロビー中央に壁画が見える。 撮影:田村収



低層棟1階からピロティ南側を眺める。左の歩道(県庁通り)から右の南庭まで、段差のない開放的な空間が広がる。

香川県庁舎は、重要文化財の指定に際して「意匠(デザイン)的に優秀なもの」「歴史的価値の高いもの」の2点で評価されました。今回の指定は、香川県庁舎の多面的な価値——庁舎建築が、総合芸術として戦後社会を表し、現在まで使われ続けている素晴らしさ——を、次の世代に伝えるきっかけになるでしょう。

(専門学芸員 一柳 友子)

引用註

- ※1 「香川県庁舎50」香川県庁舎50周年記念プロジェクトチーム、2009年、14頁
- ※2 金子正則宛猪熊弦一郎・文字書簡(1958年6月16日付香川県秘書室受付)、香川県文書館保管

江戸時代の旅日記

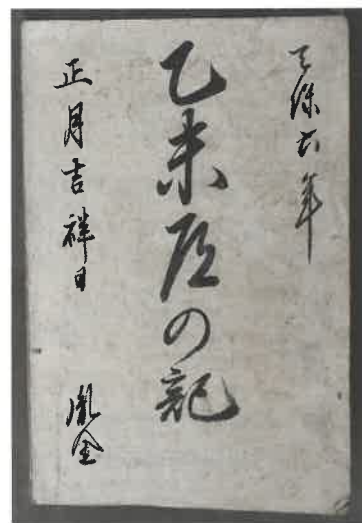
江戸時代の旅

現代の日本においては、誰もが自由に旅することができ、旅が好きな人も多いと思います。今日では娯楽の一つとして親しまれていますが、旅が民衆の間で広まるのは江戸時代中・後期といわれています。民衆が行った旅で代表的なのが寺社参詣であり、讃岐国では金毘羅参詣や巡礼による四国遍路が有名です。この頃には、名所の案内書である『名所図会』や『東海道中膝栗毛』などの旅に関連する出版物も刊行されます。

今回は、当館が所蔵する旅日記から、江戸時代の民衆の旅の一部を紹介したいと思います。

天保6(1835)年の旅日記

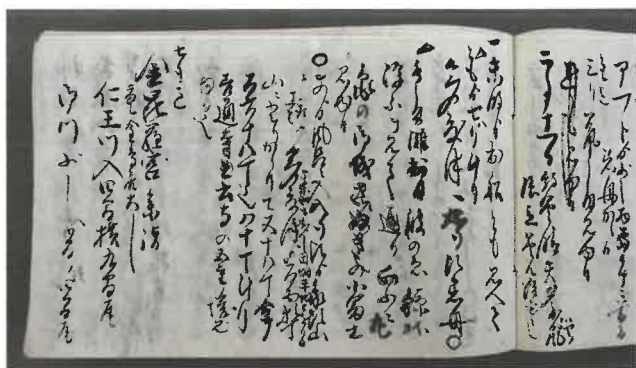
ここで紹介する資料は「乙未道の記」と題された旅日記です。日記の作者は、古賀(現在の福岡県朝倉市)出身の胤金という人物で、この日記には天保6年1月28日から同年4月25日までの旅が記されています。この中で胤金は、古賀から伊勢へ向かい、岡崎城下(現在の愛知県岡崎市)まで行き、古賀



「乙未道の記」表紙

に帰っています。その道中で様々な場所を訪れています。1月28日に地元を出発した胤金は、甘木(現在の福岡県朝倉市)に到着。翌日には太宰府に向かい、秋月街道を北上します。胤金が讃岐国に滞在するのは2月11日から13日までです。2月11日の未明に阿伏鬼(現在の広島県福山市)を船で出発し、正午に多度津へ到着します。その途中には、「丸亀の御城」と「さぬきの小富士」(飯野山)が見えたことも書かれています。多度津へ着いた胤金は、お風呂に入り、午後2時に象頭山に向かいます。午後4時には、金毘羅へ参詣。その日は多度津で一泊します。12日は、町を見物。13日の午前11時に多度津を出発し、讃岐国を後にしています。

胤金が伊勢神宮を訪れたのは3月12日であり、その途中では、訪れた先の寺社への参詣を行うほかに、吉野山や名古屋城などの名所にも足を運んでいます。帰路では、小豆島を見えています。胤金は名所の知識もあったよううかがえます。



多度津から金毘羅へ向かう胤金であるが、その道中で善通寺の五重塔を見ている。

案内書としての旅日記

明治から昭和へと時代を経るにつれ、鉄道や瀬戸内海航路の整備、観光地のパンフレットなどが次々と出版され、旅がより親しみやすくなります。現在ほど自由なものではありませんでしたが、江戸時代においても旅は人々にとって楽しみの一つでもありました。

胤金が記した「乙未道の記」は、単なる日記というより、距離や地名、名所を記しているなど、「案内書」としての側面も持っており、私たちに当時の旅の様子を教えてください。甘木に着いた胤金は、郷里に帰る前に知り合いと会っています。旅の様子を話題にしていたのではないのでしょうか。旅の話が土産にするのは、今も昔も変わりませんが、自由に旅が出来なかった分、より一層、旅の話聞くのが楽しかったのかもしれない。

(学芸員 川邊 優佑)

展覧会情報

常設展示室1

「あちこち旅日記」

3月8日(火)～5月8日(日)

ミュージアムトーク

4月2日(土)、5月8日(日) 各13:30～

「昭和南海地震体験談」

昭和南海地震

終戦直後の混乱から、ようやく復興に向けて動き始めた1946(昭和21)年12月21日午前4時19分、瀬戸の南方沖78キロを震源としたマグニチュード8.1の巨大地震が、四国を含む南西日本一帯を襲いました。香川県では死者52人、負傷者273人、全壊家屋608戸。沿岸部では地盤沈下による浸水が発生し、塩田や漁港などに大きな被害を出しました。

高松市亀水町 亀割等さんの体験談

高松市亀水町の地下地区にお住まいの亀割等さん(89歳)は、昭和南海地震の時の様子を鮮明に覚えていました。

当時亀割さんは14歳。12月21日未明、亀割さんは就寝中でしたが、強烈な震動により目が覚め、すぐさま屋外に出ました。すると、自宅付近の亀割池北方にある山の頂上付近の岩肌から、火花を散らし轟音とともに巨大な岩が崩れ、その多くが亀割池の中や、堰堤周辺に転がり落ちる様子を目撃しました。

また、亀水町内のいくつかの山でもこのように岩が崩落する被害が発生しました。この時、崩落した巨大な岩は、地元の人たちにより、生活用に転用するため、小さく砕いてその場所から取り除かれました。亀割池に落ち込んだ崩落岩も、後年に行われた池の改修の際に取り除かれ、今では地震の痕跡を見つけることはできません。しかし現在、亀割池の北側にある道路の茂みに、大きな岩を見ることができます。この岩こそ、亀割さんが目撃した昭和南海地震の際に、崩落した多くの岩の内、唯一のこされたものなのです。



亀割池周辺にのこされている崩落した岩(矢印は筆者による) 後方は亀割池



地震の際、崩落した岩

災害記録と聞き取り調査

昭和南海地震から70年以上の月日がたち、亀水町内でも亀割池北側にのこされたこの岩の由来を知る人もほとんどいなくなり、忘れられつつあります。また、昭和南海地震自体についても直接体験され、その際の様子を詳細に語る方も少なくなってきました。



岩の崩落が発生した場所を指し、地震の時の様子を語る亀割さん

江戸時代以降に記された古文書の中には、地震に関する記事をしばしば見つけることができます。そこには地震発生当時の様子や、その後の対応などについて詳細に記している場合があります。また、かつて発生した地震の被災情報などについて、先祖から口頭で伝承されてきたことを記載しているものもあります。このことは、かつての被災情報を教訓として次の地震に備えようとしていたことを示しています。

「天災は忘れた頃に来る」といわれています。古文書などを調べ、かつての地震で被災を受けた場所や、当時の様子などを掘り起こすとともに、今回のように震災体験を聞き取りした調査結果を、記録化して展示などで紹介することにより、将来地震が発生した際の減災につながれば幸いと思います。

(瀬戸内海歴史民俗資料館 主任専門職員 芳澤 直起)

展覧会情報

瀬戸内海歴史民俗資料館テーマ展

「記録にみる香川の地震」

瀬戸内海歴史民俗資料館 第9・10展示室

3月19日(土)～6月19日(日)

INFORMATION [2022.3-2022.6]

特別展「戦後デザイン運動の原点」関連行事

講演会

無料・要事前申込

◎「グラフィックデザインの現在」

Osaka Metroや国立公園のモーションロゴ、東京都現代美術館をはじめとする様々な美術館のサイン計画などを手掛ける色部氏に、デザインの仕事とデザインコミッティーの役割についてお話しいただきます。



日時：4月23日(土)
13:30～15:00

会場：地下1階 講堂

講師：色部義昭氏(グラフィックデザイナー/アートディレクター)

定員：100名(先着順)

申込期間：3月23日(水)～、定員になり次第終了

学芸講座

無料・要事前申込

◎「社会に開かれたデザインへー香川県庁舎をめぐる」

1950年代から60年代にかけての丹下健三と剣持勇に焦点を当て、彼らのデザインの捉え方についてお話しします。

日時：5月15日(日) 13:30～15:00

会場：地下1階 講堂

講師：日置瑤子(当館学芸員)

定員：100名(先着順)

申込期間：4月15日(金)～、定員になり次第終了

講演会・講座の申込方法

電話、はがき、FAX、「かがわ電子自治体システム」(*)を利用したインターネットから、はがき、FAXの場合は氏名、電話番号、行事の名称を明記してください。

申込先：〒760-0030 高松市玉藻町5番5号 香川県立ミュージアム学芸課
TEL.087-822-0247 FAX.087-822-0049

ワークショップ

有料・要事前申込

◎「ピンホールカメラで撮影しよう」

展覧会では石元泰博、岡本太郎らがフィルムで撮影した写真を展示しています。簡易なカメラを作成し、カメラの仕組みを楽しんでみましょう。

日時：4月17日(日) ①10:00～12:00 ②13:00～15:00

集合場所：2階 西ロビー

対象：一般(小学校3年生以下は保護者の同伴が必要)

参加料：一人につき400円

定員：各回10名(申し込みが多い場合は抽選)

申込期間：3月10日(木)～3月31日(木) ※当日消印有効

ワークショップの申込方法

往復はがき、「かがわ電子自治体システム」(*)を利用したインターネットから、①②のいずれか1回2名まで申し込み可。往復はがきの場合は、氏名、住所、電話番号、年齢、ワークショップ名、①②のいずれかを明記してください。

申込先：〒760-0030 高松市玉藻町5番5号 香川県立ミュージアム学芸課

※「かがわ電子自治体システム」を利用する場合

香川県立ミュージアムホームページ右下の「関連リンク」から「【香川県】電子申請のページ」をクリックしてください。

カフェポット ミュゼ

特別展にちなんだメニューをご用意してお待ちしています。

(販売期間：4月9日～5月29日)。

営業時間：9:00～17:00

(オーダーストップ 16:30)

ミュージアムショップ

高松松平家博物図譜関連書として、新たに「衆芳画譜 研究編」を販売しています。

営業時間：9:00～17:00



トークイベント

要観覧券・申込不要

◎スペシャルトーク

「青山時代の岡本太郎 1954-1970」 「岡本太郎×建築」など数々の展覧会を手掛け、本展企画者でもある川崎市岡本太郎美術館の佐藤学芸員に見どころをご紹介します。

日時：4月10日(日) ①11:00～ ②14:00～ (約30分)

集合場所：2階 西ロビー

講師：佐藤玲子氏(川崎市岡本太郎美術館 学芸員)

◎ナイトトーク

日時：4月16日～5月28日の毎週土曜日 各18:30～(約30分)

集合場所：2階 西ロビー

講師：当館学芸員

GWイベント

有料(一部)・申込不要

ペーパークラフトでつくる県庁インテリア

4月29日(金・祝)～5月1日(日)

つくろう!

ミニチュア・坐ることを拒否する椅子

5月3日(火・祝)～5日(木・祝)

などワークショップを開催!

詳しくは当館ホームページにて。



瀬戸内海歴史民俗資料館

テーマ展 「記録にみる香川の地震」

他県にくらべ香川県は比較的地震災害が少ないといわれています。しかし江戸時代以降の古文書などには地震に関する記録が見られます。過去の震災記録から現代の防災について考えます。

会期：3月19日(土)～6月19日(日)

会場：第9・10展示室

瀬戸内ギャラリー 第5回企画展

戦後香川の“新たな産業工芸”創出

ージェットロ収集海外優秀商品と古民芸に学ぶー

会期：4月1日(金)～6月26日(日)

会場：第1展示室 中2階 瀬戸内ギャラリー ※詳細は4頁へ

瀬戸内海歴史民俗資料館

古城を思わす石積みの外観が印象的な建築は「日本建築学会賞」を受賞した、建築家・山本忠司の代表作。回廊式の展示室では、木造船や船大工道具などの民俗資料を中心に瀬戸内のくらしと文化をたどります。瀬戸内海が一望できる展望台もお楽しみください。

開館時間：9:00～17:00 ※入館時間は16:30まで

休館日：月曜日(月曜日が休日の場合は原則として翌火曜日)

※5/2は開館



香川県立ミュージアム

〒760-0030 高松市玉藻町5番5号
TEL.087-822-0002(代表) FAX.087-822-0043
https://www.pref.kagawa.lg.jp/kmuseum/kmuseum/



【分館】瀬戸内海歴史民俗資料館

〒761-8001 高松市亀水町1412-2
TEL.087-881-4707 FAX.087-881-4784
https://www.pref.kagawa.lg.jp/kmuseum/setorekishi/



【分館】香川県文化会館

〒760-0017 高松市番町1丁目10番39号
TEL.087-831-1806 FAX.087-831-1807
https://www.pref.kagawa.lg.jp/kmuseum/kmuseum/bunkakaikan/



日時・内容については変更になる場合があります。最新情報は当館ホームページをご覧ください。

●発行日 令和4年(2022)2月25日 ●編集・発行 香川県立ミュージアム ●印刷 株式会社太陽社